

<ユダヤ教>

(1) 起源

エジプトに奴隷として捕囚されていた遊牧民ヘブライ人（さ迷える遊牧民、の意）が主の啓示を受けて創成した。最大の預言者はモーゼ。預言者とは、神託を受ける者。自らが成るのではなく、あくまでも神から一方的に選ばれる。

モーゼが生まれた時、エジプトのファラオはヘブライ人の嬰兒をすべてナイル川に投げ込むよう指示した。しかし、母が望みを掛け、パピルスの籠に入れてナイル川に流した。それを拾ったのが、エジプトの王女である。ヘブライ人の子供であることは解っていたが、あまりにものいたいけな様子に打たれ、育てることにした。この時、モーゼの母の姉妹が物陰から飛び出し、良い乳母がいます、と言って、モーゼの母を紹介した。母は乳母となり、王女の下でモーゼは大切に育てられることとなった。モーゼという名は、この時に付けられたものであり、“引き出す” という意味のヘブライ語である。水（川）の中から引き出されたことに由来する。

モーゼはエジプトの宰相となるほどまで成長した。しかし、同族の民がエジプト人によって苦しめられているのを見て、エジプトに反旗を翻すようになる。これを、主（しゅ）が手助けした。「私はお前の父祖の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。エジプトに居る私の民を解放し、乳と蜜が流れるカナンの地へ連れて行くのだ」モーゼが主に名を尋ねると、「私は“在りて在る者”。イスラエルの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、お前たちの“主”である」と名乗った。“在りて在る者”をヘブライ語で記述すると YHWH であり、ヤハウエと読む。（ヘブライ語では、子音を表さない。故に、後々いろいろな解釈がされるようになった。）神聖故、みだりに唱えてはならない言葉である。

モーゼは主から様々な啓示を受け、奇蹟を起こした。例えば、ファラオと神殿で対決した時、モーゼの兄アロンとファラオが投げた杖はそれぞれ蛇に化けたが、アロンの杖がファラオの杖を飲み込み、ファラオはモーゼに従った。（この杖を「アロンの杖」と言う。）またある時は、主がエジプト人の嬰兒を虐殺するので、ヘブライの民は家の柱を子羊の血で赤く染めて聖別しなさい、と言われ、教えに従ったヘブライの民の嬰兒は助かった。（現在、ユダヤ人にとって最も重要な「過ぎ越しの祭り」の起源である。）

このような数々の“主の奇蹟”に驚いたファラオは、モーゼがヘブライの民を率いて、エジプトから出て行くのをとりあえず許した。（出エジプト。）神がヘブライの民を“選ばれし民”とし、約束の地カナン（現イスラエル）を示したからである。しかし、奴隷生活に慣れきったヘブライ人はすぐに墮落する傾向にあったので、主は遠回りでも彼らを導いた。ファラオはエジプトを出てからヘブライ人を虐殺しようとしていたので、軍に追わせた。ヘブライの民の目を葦の海（紅海）が遮る。民の中から、ここで死ぬよりも奴隷に戻った方が良く、という声が多数挙がった。しかし、モーゼは神の御加護を力強く告げた。この時、最大の奇蹟が起こった。モーゼが杖を上げると、葦の海が真っ二つに割れ、ヘブライの民は無事に渡ることができた。しかし、追ってきたエジプト軍が割

れた葦の海を渡ろうとした時、葦の海は元通り 1 つとなり、エジプト軍は飲み込まれて全滅した。ここに偉大なる主の奇蹟を目の当たりにしたヘブライの民は、以後、モーゼに従うこととなる。

しかし、約束の地はまだ遠い。飢えや渇きが容赦なく襲ったが、必要最低限のものを主は与えられた。その食べ物をマナと言う。白いウエハースのようなものであり、蓄えようとしても、日が昇ると溶けてしまった。また、モーゼが杖で岩を打つと、水が湧いて出た。

約束の地に到達する前、シナイ山の麓に野営した。モーゼがシナイ山にて、主の啓示を聴くためである。40 日間山に籠り、主は 10 の戒めを 2 枚の石の板の表裏に刻んだ。ところが下山してみると、民は“黄金の牡牛”を崇めて異教崇拜・偶像崇拜を行い、乱痴気騒ぎをしていた。主は偶像崇拜や異教崇拜を徹底的に禁止していたので、怒ったモーゼは石板を破壊し、主導者を処刑した後、更に四十日間、山に籠った。今度はモーゼが教えを 2 枚の石の板のうち、片面（表面）に刻んだ。これが有名な「モーゼの十戒」である。

その後、幾度か苦難が襲い掛かったが、何とか約束の地の目の前のオアシスまで辿り着いた。その間、主は神殿および十戒石板を納める箱の製作を指示した。十戒石板を納める箱のことを「契約の箱＝アーク」と言う。神殿は移動式の幕屋（日本の神社の本殿が幕屋形式）であり、「契約の箱」を安置し、そこに主が降臨した。降臨する際は、雷雲と稲妻を伴った。

モーゼはカナンの地に偵察隊を派遣した。偵察隊は、町はとても強固で強そうだと告げると、民はたちまちにして動揺した。モーゼがいくら主の御加護があると説いても駄目だった。あれだけの奇蹟を目の当たりにしたのにも関わらず、まだ信じられない民に対して、主の怒りは爆発した。ヘブライの民は、約束の地に到達するまで更に 40 年間も荒野をさ迷うという主の罰を受けた。この間、多くの者が荒野で蛇に咬まれて死んだ。主は言われた。「旗竿の上に炎の蛇を掲げなさい。蛇が人を咬んでも、その人がその蛇を上げば、命を得る」これで多くの者が救われた。旗竿とは、T 字型の十字架の様な形をした木のことである。これを「モーゼの旗竿」と言う。

モーゼの死後、後を継いだ預言者ヨシュアに従い、ようやく約束の地カナンに辿り着くことができた。約束の地に辿り着けたのは主の思し召しであるが、本来ならば、もっと早く辿り着けたはずである。ヘブライの民はここに於いて、唯一絶対の神であるヤハウエを信仰するようになる。これが、ユダヤ教の始まりである。ユダヤ教とは“唯一絶対神ヤハウエとの契約”である。故に、“選ばれし民”であるヘブライの民こそ、預言されし至福の千年王国を築く民であると信ずる。

(2) 旧約聖書

ユダヤ教の聖典が旧約聖書である。ユダヤ教徒は、単に聖書と言う。これは、新約聖書がキリストの教えを基にしたものであるが、ユダヤ教徒はキリストの教えを認めていない故、聖書は唯一と考える。

聖書はいわゆる宗教書ではなく、歴史書あるいは契約書という性質のものである。39 の書物から構成されるが、大きく 3 つに分類し、「律法（トーラー）、

預言者（ネイビーム）、諸書（ケトゥビーム）」（TNK、タナハ）と呼ぶ。最も重要なのが律法である。故に、律法学者が尊重された。なお、聖書の内容が史実かどうかは、別問題である。

A：律法

すべてモーゼが記したということになっているので、“モーゼ五書”とも言われ、“聖書の中の聖書”である。

- ・創世記（50章）
主による世界の創造からヨセフの物語に至る民族史。詳細は後述。
- ・出エジプト記（40章）
エジプト脱出からシナイ山に於ける主との契約、律法の授与まで。
- ・レビ記（27章）
祭祀に関する律法。祭祀はレビ族（ラビ）しか行えない。
- ・民数記（36章）
40年間、荒野をさ迷った際の物語。
- ・申命記（34章）
申命とは、主から律法を再び命じられるという意味で、他の四書に記された主との契約を、モーゼの演説を通じて統合・再編成した律法集。

B：預言者

ネイビームとはナービーの複数形であり、ナビゲーターの語源である。預言者とは、主の言葉を預かり、自分の意思などを反映させることなく、人々に伝える伝道者のことである。旧約では「前の預言者」と「後の預言者」に分けられる。

「前の預言者」とは、イスラエルが民族として登場した後の主と人との関係をテーマにしたものであり、「ヨシュア記」「士師記」「サムエル記」「列王記」から成る。

「後の預言者」とは、預言者自身が民と王に語りかけるという体裁であり、「イザヤ書」「エレミア書」「エゼキエル書」「十二小預言書」から成る。

C：諸書

ヘブライ語で“書かれたもの”の意味で、主への賛美歌、歴史書、様々なジャンルの文学的諸書を集成したもの。

- ・詩文書：詩篇、箴言（しんげん）、ヨブ記。
- ・5つの巻物：雅歌、ルツ記、哀歌、伝道の書、エステル記。
- ・預言書：ダニエル書。

- ・歴史書：エズラ記、ネヘミヤ記、歴代誌。

D：その他

口伝律法や、聖典性に疑問が持たれたもの。

- ・タルムード

BC2 世紀から AD5 世紀末ごろまでに編纂された口伝律法。特に、背教によるバビロン捕囚の後悔の念から、本来のトーラーを過激なまでに厳格化したもの。現在のユダヤ教は、タルムードが主体であると言っても良いほどで、トーラーよりも大きな影響力を持っている。

- ・典外書

外典と偽典がある。故あって、聖典から外されたもの。宗派の差別化、当時の政治的判断、等。よって、ここにこそ真実が隠されている可能性がある。

外典：トビト書、ユディト書、マカバイ記（一、二）、ソロモンの知恵、ベン・シラの知恵、バルク書、エレミアの手紙、ダニエル書補遺、エズラ記、マナセの祈りなど。

偽典：マカバイ記（三、四）、アリストテラスの手紙、エノク書、ヨベル書、アダムとイブの生涯、モーゼの遺訓など。

(3) 創世記の概要

モーゼ五書のうち、創世記が占める割合は極めて大きい。何故なら、世界と人間がどのようにして創造されたのかが記載され、ヘブライの民の系統が示されているからである。すべては紹介できないので、創世記の概略と、ヘブライの民の系図を示す。これは、他の宗教を理解する上でも、極めて重要である。

- ・1～2 章（天地創造）

主が「光あれ」と言うと、光ができた。主は光と暗黒を分け、光を昼と呼び、暗黒を夜と呼んだ。夕べがあり朝があった。第 1 の日である。（以下、いずれも「夕べがあり朝があった」という表現があるが、割愛する。）

主は大空を造り、その上と下とに水を分けた。主は大空を天と呼んだ。第 2 の日である。

主は「天の下の水は 1 つに集まり、乾いた所が現れよ」と言った。乾いた所を地と呼び、水の集まった所を海と呼んだ。「地は草と果樹を芽生えさせよ」と言うと、地は草を芽生えさせ、果樹を芽生えさせた。第 3 の日である。

主は太陽と月と星を造り、太陽に昼を、月に夜を司らせ、それらを天の大空に置き、地を照らさせ、昼と夜を支配させ、光と暗黒を分けた。第 4 の日である。

主は水に群がるもの、蠢くすべての生き物、翼のあるすべての鳥を創造した。主はそれらを祝福して言った。「産めよ、増えよ、満ちよ」第 5 の日である。

主は地の獣、家畜、土を這うすべてのものを造った。次に主は、「我々に似せて人を造ろう」と言い、自らを象って男と女を創造した。主は人を祝福して言った。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせ、すべての生き物を支配せよ」第6の日である。

こうして天地万物は完成した。第7の日に、主は仕事を離れ安息した。主は第7の日を祝福し、聖別した。(ユダヤ教での安息日は土曜日。キリスト教が日曜日を安息日に行っているのは、預言通り、イエスが磔刑に処せられた金曜日を含めて数えて3日目に復活したことを記念したため。)

・2～3章 (アダムとイブ、人類の誕生)

主は、自分に似せて、土から人を造った。それ故、最初の人をアダム(赤土のヘブライ語アダマによる)と言う。

東のエデンに園を設け、食料となるすべての樹と、中央に「生命の樹(いのちのき)」と「知恵の樹」を造った。「生命の樹」と「知恵の樹」には、蛇が絡まっていた。そして、アダムをエデンに住まわせ、耕させ、守らせた。主は、「生命の樹」と「知恵の樹」からは食べていけない、と命じた。

主はアダムの肋骨から女を造った。男(イシュ)から生まれたそれを女(イシャ、イブ)と名付けた。アダムとイブは裸であったが、恥ずかしがることはなかった。

しかし、イブは「知恵の樹」の蛇にそそのかされて「知恵の実」を食べ、アダムにも食べさせた。すると、2人は裸であることを知り、イチジクの葉で腰を覆った。それを知った主は怒り、「女よ、お前の孕みの苦しみは大きくなる。(出産の痛み。)アダムよ、お前のせいで土は呪われた。お前は生涯、食べ物を得ようとして苦しむ。(労働の義務。)土から生まれたに過ぎないお前は、土に還る(限られた生)」

2人はエデンの園から追放され、死の支配を受けるようになった。主は人が善悪を知り、ついには「生命の樹」の実を食べて永遠に生きるようになるかもしれないと恐れ、エデンの東に天使ケルビムと炎の剣を置き、「生命の樹」に至る道を守った。

・4章 (カインとアベル、人類初の殺人)

イブはカインを生み、続いてアベルを生んだ。(後にセツも。)カインは土を耕すものとなり、アベルは羊を飼うものとなった。

ある時、カインは主に土の実りを、アベルは子羊を捧げた。主は子羊に目を留めたが、土の実りは無視した。主はカインに対して言った。「何故怒り、顔を伏せるのか。お前が善ならば、顔を上げよ。善でなければ、罪がお前を慕うだろう。お前はそれを支配しなければならない」しかし、怒ったカインはアベルを野に誘い出し、襲って殺した。すると、主は言った。「何をしたのか。今や、お前は呪われる者となった。弟が流した血を飲み込んだ土よりもなお、お前は呪われる。もはや、お前のために土は実りを与えないであろう。お前は地上を彷徨い、さすらう者となるのだ」

カインは主に言った。「私は地上を彷徨う。私を見た者は、きっと誰でも私を

殺す」主は言った。「カインを殺すものは、誰でも7倍の復讐を受ける」カインを見た者がカインを殺さない様にするため、主はカインに印を付けた。カインは主の前から去り、エデンの東のノド（さすらい）の地に住むようになった。

・6～9章（ノアの箱舟）

人類は穢れ、墮落した。主は人を造ったことを後悔し、地上から拭い去ることとした。しかし、一途な信仰心を持っていたノアだけは、主の恵みを受けることとなった。「お前は箱舟（アーク）を造り、家族と共に入りなさい。また、全ての生き物を1つがいつつ連れて入り、お前とともに生き延びるようにしなさい」

やがて洪水が起こり、40日間地上を覆った。ノアと箱舟に居たものだけが残った。ノアは、主のために祭壇を築いた。主はノアの義を認め、こう言った。「大地を呪い、生き物を滅ぼすことはもうしない。産めよ、増えよ、地に満ちよ。今後、洪水によってすべての肉なるものが絶たれることはなく、地を滅ぼすことも無いだろう」ノアとノアの子から、全世界の人々は広がった。

ある時、ノアが収穫した葡萄から作ったワインを飲んで酔いつぶれ、丸裸で寝ていた。見て見ぬふりをするのが礼儀なのに、1人の息子ハムはおもしろがって2人の兄にそれを告げた。兄のセムとヤフェトは、父親の裸を見ない様に、そっと着物を掛けた。目覚めたノアはハムに対して激怒し、言った。「ハムの子カナンは呪われよ。セムの奴隷となり、兄たちに使えよ」

・11章（バベルの塔）

知恵のつき始めた人類は、天にまで達する塔を造ろうとした。主はこれを見て言った。「彼らはみんな同じ言葉を持った1つの民だ。その彼らが最初に始めた仕事がこれだ。これでは、今後彼らが成すことに、不可能はなくなるであろう。直ちに彼らの言葉を混乱（バラル）させ、互いの言葉を聞き分けられないようにしよう」

民は散らされ、塔を築くことを放棄した。故に、この町は混乱に因んで、バベルと呼ばれた。

・12～22章（アブラハム）

「生まれ故郷（メソポタミアのウル）を離れ、私が示す土地に行きなさい」と主がアブラムに言った。アブラムはカナンの地に、甥のロトはヨルダンの地ソドムに住むことになった。（ソドムとゴモラは墮落し、主の怒りを買って滅ぼされた。ロトは脱出して無事だった。）

アブラムが99歳になった時、主が現れて言った。「お前は（シュメール風の）アブラムではなく、アブラハムと名乗りなさい。私はお前とお前の子孫に、永遠の契約を立てよう。カナンの地すべてを永久の土地として与えよう。契約の印として、男子は割礼しなさい。そして、お前に男子を授けよう」

アブラハムが100歳のとき、妻サラは男子を産み、イサクと名付けた。ある時、主がアブラハムを試した。「イサクを連れて命じる山に登り、私に捧げなさい」アブラハムは山に登って祭壇を作り、イサクを屠ろうとした。その時、天

から主が呼び止めた。「手を下してはならない。お前が主を畏れる者であることが解った。お前は自分の息子すら、惜しまない。お前を祝福し、お前の子孫を増やすことを誓おう。地上の民は、すべて、お前の子孫によって祝福を得るであろう。お前が私に従ったからである」

・31～32章（ヤコブの階段）

アブラハムの孫ヤコブ（踵を握る者、の意）は、旅の途中、野宿して夢を見た。先端が天まで達する階段が地に立てられ、天使たちが昇り降りしていた。主がヤコブの傍らに立って言った。「私は、お前の祖父アブラハムと父イサクの神である。この土地を、お前とお前の子孫に与えよう」

また、ある晩、ヤコブのもとに一人の天使が現れ、夜明けまでヤコブと格闘した。

「夜が明けてしまうから、もう去らせてくれ」

「いいえ、祝福してくださるまでは離しません（踵を握って離さない）」

「お前の名は何と言うのか」

「ヤコブです」

「もうお前はヤコブではない。イスラエルと名乗りなさい。お前は神と戦って勝ったからだ」

とその場でヤコブを祝福した。

・37～46章（エジプト）

イスラエルに溺愛されていたヨセフは、兄たちが自分に睨く夢を見たと言ひ、兄たちの反感を買って、エジプトに売られてしまった。しかし、ヨセフは夢を読み解く能力を買われ、ファラオの夢を解き明かし、宰相にまでなった。このようなヨセフの能力により、エジプトは飢饉とは無縁であった。

ところが、ヨセフの生まれ故郷であるカナンの地では、飢饉で食料が底をついた。穀物が豊富であるというエジプトに、イスラエルは息子たちを遣わした。

再会したヨセフと兄たちは和解し、喜び合った。父の健在を知ったヨセフは、一族をエジプトに呼び寄せた。その旅の途中、主がイスラエルに呼びかけた。「エジプトへ行くことを恐れてはならない。私がお前と共にエジプトに下り、私がお前を必ず連れ戻そう」

こうして、ユダヤ民族の受難と放浪の歴史が始まった。

(4)系図

アダムからアブラハム、ダビデ、ソロモン、イエスに至る完全系図は下記ページ参照のこと。ただし、キリスト教によるページのため、イエスがダビデの系統かどうかの真偽は定かではない。イエスの父は、大工だったからである。

<http://www.chojin.com/keizu/kaisetsu.htm>

<http://www.chojin.com/keizu/top.htm>

重要な部分だけ抜き出す。

・アダムーセツ―…―ノアーセム―…―アブラハムーイサーーヤコブ（イスラエル）―十二支族。主と最初に契約を交わしたのがアブラハムである。故に、アブラハムはユダヤ教、キリスト教、イスラム教の祖と言われる。

・十二支族：イスラエルの 12 人の息子ルベン、シメオン、レビ、ユダ、ダン、ナフタリ、ガド、アセル、イッサカル、ゼブルン、ヨセフ、ベニヤミンが族長となる。これこそがユダヤ民族の基礎。よって、正統なユダヤ民族（ユダヤ人）とは、イスラエル人（イスラエル十二支族）と言う。ただし、レビ族は祭祀を専門に司るため、数に入れない。また、ヨセフに代わって、ヨセフの 2 人の息子マナセとエフライムを加える。

・レビーコハテ―アムラム―アロン、モーゼ。レビ族は祭司一族。祭祀はこの一族以外の者が行ってはならない。モーゼはユダヤ民族最大の預言者。

・ユダ―…―サウル―ダビデ―ソロモン。

(5) 歴史

- ・ BC1900 頃：アブラハムの時代。これ以前は、神話として扱う。
- ・ BC1300 頃：モーゼの時代。
- ・ BC1020 頃：サウルによる十二支族統一、ダビデ王と発展。エルサレムにソロモン第一神殿の建立。移動式幕屋神殿は、ここに定住を見る。これまでは、最長でも 20 年しか一定場所に留まらなかった。
- ・ BC928：背教が盛んになる。特にバアル神。北イスラエル王国（十支族）と南ユダ王国（二支族）に分裂。南（ユダ、ベニヤミン族）が厳格なユダヤ教徒。
- ・ BC722：北イスラエル王国が背教の罰により、アッシリアによって滅亡。アッシリア連行。
- ・ BC586：南ユダ王国も背教が盛んになり、バビロニアによって滅亡。バビロン捕囚。
- ・ BC515：アッシリア及びバビロニア捕囚民の開放。エルサレムに帰ってきたのは、何故か南系のみ。北系のイスラエル十支族は、歴史から忽然と消えた。南系による第二神殿の建立。（この時の王ヘロデはユダヤ人ではなく、ローマ人。）しかし、ペルシャ、エジプト、シリア、ローマ帝国の支配下。
- ・ BC4?：イエスの誕生。
- ・ AD30 頃：イエスの磔刑。（イエスについては、<キリスト教>参照。）
- ・ AD68：ローマ帝国が第二神殿を破壊。以後、第二次大戦後にイスラエルが建国されるまで、離散（ディアスポラ）と苦難の道のり。

(6) 三種の神器

ユダヤ教に於ける三種の神器は、「十戒石板の入った契約の箱アーク」「アロンの杖」「マナの壺」である。マナの壺とは、マナを蓄えておいた黄金の壺のこ

とである。

これら以上に重要なのが「契約の箱アーク」である。これは、祭司一族であるレビ族しか触れることができない。他の者が触れると、たちどころに雷に打たれ、死ぬのである。アークとはアカシア製の神輿のような箱であり、移動の際には、下部にある黄金の輪に木を通し、ラッパなどを鳴らしながら、威勢良く担がなければならない。大きさも神輿ほどで、上には黄金製の天使ケルビムが向かい合って輝く。ケルビムは羽を合わせて、アークの上に三角形の空間を作っている。そこを「贖い（あがない）の座」と言う。その「贖いの座」に主は降臨し、降臨する際は雷雲と稲妻を伴った。

主は、幕屋式神殿の前に十戒石板を納めたアークを安置し、その前にアロンの杖とマナの壺を置くよう指示した。

(7) 選民思想

主は人と契約を交わした。その相手として唯一選んだ民族がユダヤ民族である。このような経緯から、ユダヤ人には“神より選ばれた民”という観念が存在し、他民族との軋轢を生んできた。

しかしながら、ユダヤ教の教えとは、基本的な戒律を守るものは唯一神の救済の対象となり得ること、その救済には“主との契約”と“律法の遵守”が絶対条件である。つまり、これらを遵守できるものなら誰でも、救済の対象となり得るのであり、唯一の民族を救済するわけではない。

他の聖書の民であるキリスト教もイスラム教も、基本的に他の宗教に対しては寛容であり、救済されるのは自分たちだけである、などとは考えていない。(一部、急進的な考えのグループもある。)

(8) メシア

古代イスラエルの王が王位を継ぐとき、主に捧げた聖油を額に塗り、聖別が行われた。後にこの言葉が、理想的な英雄や王の概念になり、転じて、民族を救う救世主（ギリシャ語でキリストス）を指す言葉となっていった。特に、この原型となったのはダビデ王である。そのため、よく“ダビデの再来”などと言う。キリスト教では、イエス・キリストこそがメシアであると見なす。

(9) 終末思想

ユダヤ教に限らず、キリスト教、イスラム教には終末思想がある。それは、旧約聖書に“終末の日”が記述されていることによる。

「その日、主は御足をもってエルサレムの東にあるオリーブ山に立たれる。オリーブ山は東と西に裂け、非常に大きな谷ができる」

「メシア再臨の際に、最初の復活がオリーブ山で起きる。そして、メシアが天の軍勢を引き連れて、黄金の門から入場するときに、死者が復活する」

「蘇った死者は主によって裁かれ、永遠の命を得られる者と、地獄へ落ちる者とに分けられる（最後の審判）」

それ故、実際にエルサレムに存在する黄金の門は、エルサレムを占領したイスラム教徒の手で封印されている。また、これらの宗教では、死者を土葬する。

“最後の審判”のために、肉体が存在しなければならないからである。

このような終末思想が、様々なイカサマ予言者（神託ではないので「預言」ではない）を生み、多くのカルト宗教を氾濫させている原因である。

“最後の審判”は“契約の民”故に行われる。契約を遵守したかどうか、善が重いか悪が重いか、天秤で量られるのである。このような思想は、古代エジプトなどにも見られる。

なお、有名なメギドの丘、別名ハルマゲドン、イエスの生誕地ナザレの南西にある。ハルマゲドンでの世界終末戦争は、キリスト教の新約聖書ヨハネの黙示録の内容であり、ユダヤ教のものではない。

(10)エルサレム

ソロモンの第一神殿、ヘロデの第二神殿が建立されたのが、エルサレムである。エルサレムとは、アラム語で“エル・シャローム”であり、“平安の都”“聖なる都”の意味である。アブラハムがイサクを屠ろうとした場所とも言われている。

かつての神殿があった場所を“神殿の丘”と言い、モスLEM（イスラム教徒）に占領されて以来、“岩のドーム”が建てられている。ここは、ユダヤ神殿の至聖所でもあるが、ムハンマドが昇天した場所でもあるが故、ユダヤ教、キリスト教だけでなく、イスラム教の聖地でもある。聖地奪回の名目の下、幾多の戦いが繰り広げられたことは言うまでもない。

(11)カバラ

神もしくは神的世界との直接的・個人的な交流・接触と、秘められた神智の会得を目指す神秘主義は、ユダヤ教の中で「カバラ（より原語に近くカッパラーとも言う）」として大成された。

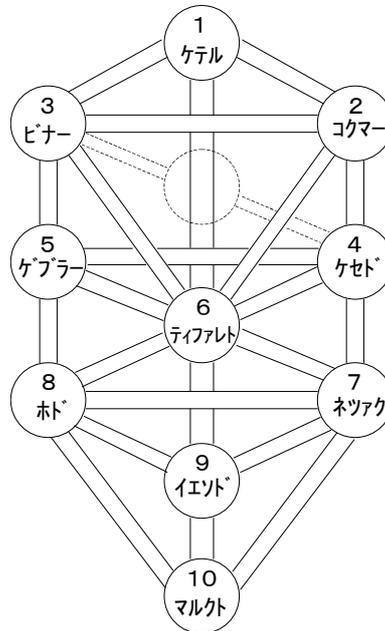
最も根幹を成すものが、図に示す「生命の樹（いのちのき）」である。これは、エデンの園にあった樹の名前である。その実を食べると永遠の生命を得られることから、カバラを極めれば永遠の生命を得ることができることを意味している。ノアの息子セムの一族が継承した。

10個のセフィロト（単数形はセフィラ、図の1～10）と22本のパス（各セフィラを結ぶ小径）から成る。各セフィラには、次の意味がある。

1：ケテル（王冠）、2：コクマー（知恵）、3：ピナー（理解）、4：ケセド（慈悲）、5：ゲブラー（峻厳）、6：ティファレト（美）、7：ネツァク（永遠）、8：ホド（威厳）、9：イエソド（基礎）、10：マルクト（王国）。

22本のパスはヘブライ語のアルファベット22文字に対応し、また、タロットカードの大アルカナの22枚もこのパスに由来する。中心を貫く高い柱を「均衡の柱」、向かって右の柱を「慈悲の柱」、向かって左の柱を「峻厳の柱」と言う。これにセフィロトと合わせると「均衡の柱」は「御父」、「慈悲の柱」は「御子」、「峻厳の柱」は「聖霊」を表している。すなわち、3本の柱が三神を表すが故、神は“柱”として数えられる。人間にとって最も関わりがあるのは「慈悲の柱」

である。



また、ケテル、コクマー、ビナーで至高世界、ケセド、ゲブラー、ティファレトで中高世界、ネツァク、ホド、イエソドで下層世界の三界を表す。マルクトは“精神の地獄”であり、三界には含めない。

ビナーとケセドを結ぶ線上には、隠されたセフィラ“ダアト”がある。これは秘中の秘であり、ケセドの中高世界からビナーの至高世界へ至る門となるので、“知識の門”と言われる。

この樹の最上位に住む神をエリュオニムと言う。神の意志が電撃のように 1→10へと下降する。この雷の閃光をカブと言う。(主が降臨する際、稲妻が伴うことを思い出そう。)これに対して、生まれたばかりの人間はマルクトにあり、順に「生命の樹」を上昇する。そして、真理を悟って神界に至る。

絶対神は、ケテル、コクマー、ビナーで形成される三角形の至高世界から人間界を覗いている。これを“万物を見通す目”と言い、アークの贖いの座はこれが原型である。これは、エジプトでは“ホルスの目”“ピラミッド・アイ”として、また、一部の組織では“ルシファー（魔王）の目”として表されている。

「生命の樹」には蛇が絡みついている。イブを唆したのはこの蛇ではなく、「知恵の樹」に居た蛇である。それ故、「知恵の樹」の蛇はサタンに喩えられる。これに対して、「生命の樹」の蛇は様々な恩寵を与える。「モーゼの旗竿」に掲げられた炎（青銅）の蛇は、この蛇の象徴である。蛇やその化身の龍は、様々な宗教に於いて、人間の創造などに関わりを持ち、畏怖されている。

この「生命の樹」の形は、そのまま人間の形に当てはまる。と言っても、後

る向きの人間の姿である。

1：ケテル（頭頂）、2：コクマー（右脳）、3：ビナー（左脳）、4：ケセド（右心房・右心室）、5：ゲブラー（左心房・左心室）、6：ティファレト（太陽神経叢）、7：ネツァク（右足）、8：ホド（左足）、9：イエソド（性器）、10：マルクト（足下）。

これを「アダム・カドモン」と言う。主がアダムを創る際の原型となったものである。人間にとって最も重要なセフィラは、パスが最も多く集まり、太陽神経叢に相当するティファレトである。しかし、後ろ向きである。そこで、キーとなるのが“鏡”である。神の本質、カバラの本質を知るためには、鏡に映った“鏡像”を見なければならぬのである。

また、「生命の樹」は無限に上昇していく。逆に、墜ちた者は、無限に下降する。鏡写し（合わせ鏡）では「生命の樹」は必ず「慈悲の柱」あるいは「峻厳の柱」を共有する。しかし、180°回転したものは、これらの柱を共有しない。これを「死の樹」と言う。つまり、「慈悲の柱」あるいは「峻厳の柱」に鏡を置いた場合、鏡像はその柱を共有する形となる。また、マルクトを除いた「生命の樹」の底辺に鏡を置いた場合、鏡像の柱は「生命の樹」の各柱を延長したものとなる。しかし、「死の樹」は「生命の樹」の「均衡の柱」を延長したものであるが、「慈悲の柱」と「峻厳の柱」は延長したものではなく、形としては「生命の樹」と変わるところは無い。それ故、「死の樹」に居る者はその自覚が無い。

邪心無くカバラを極めた者は、「生命の樹」を無限に上昇するが、魔に墜ちた者は「死の樹」を無限に下降し、その自覚すらない。これを、ケリポットに墜ちる、と言う。自らは、「生命の樹」を上昇していると錯覚している。「地に墜ちたルシファー」とは、その喩えでもある。カルト宗教などは、その典型例である。「死の樹」自体は世間から見ればマイナスだが、そこに落ちている者はプラスと錯覚している。よって、「死の樹」の中で更にプラスになるためには、世間から見てよりマイナスのことをしなければならぬ。マイナス掛けるマイナスでプラスだからである。この連鎖により、「死の樹」を下降していくのみである。上昇するためには、世間から見てプラスのこと、すなわち、彼らから見ればマイナスのことをしなければならぬ。しかし、それはその組織や自らがマイナスであることを認めることになるので、できない。がんじがらめの鎖に絡め取られ、自分だけではどうすることもできなくなる。「死の樹」を下降している者の特長は、世の中の全てが逆に見え、人の忠告や情がわからず、黙々と己のケリポットに閉じこもり、“下降の修行”をするだけである。

カバラは古代エジプトで盛んであった。エジプトに居たヘブライの民は、この奥義を知った。しかし、現在知られているカバラとは、中世ヨーロッパに於いて盛んに研究されたもので、そのほとんどは黒魔術的要素を含む。黒魔術とは、己の願望を達成するために、人を犠牲にする。典型的な例がヒットラーである。ナチスは黒魔術を行っていた事実がある。（現在、世界を牛耳っている連中も、悪魔崇拝を行っている、という噂がある。）

それに対して、人のため、世のために行う術が白魔術である。お守りや護符がこれに相当する。お守りや護符には特別な図形（五芒星＝ソロモンの星＝セーマン、六芒星＝ダビデの星、九字＝ドーマン、十字など）や文字が描かれており、これらが特殊な作用をすると考えられている。また、お守りや護符自体が、アダム・カドモンを象ったものもある。

呪術的な力は、黒魔術が圧倒的に大きい。故に、人は“魔”に魅了される。中世ヨーロッパに於いて発達したカバラの流れを引く水晶魔術、タロット、占星術などは、極めて危険である。本来の意味＝「生命の樹」が理解されていないからである。（巷の書店に溢れる魔術書は、それ故、危険である。）しかし、カバラの本筋をいく占星術などの流れは、この限りではない。カバラだからと言って、一概に否定すべきものではないのである。創世記で、“エデンの東に天使ケルビムと炎の剣を置き、「生命の樹」に至る道を守った”とあるのは、むやみに「生命の樹＝カバラの奥義」に近寄ってはならない、という教訓でもある。

(12)ユダヤ人

現在、ユダヤ教徒であり、かつ母親がユダヤ人の場合にのみユダヤ人と言える。しかし、本来のユダヤ人とは、“主との契約”を行った“イスラエルの十二支族”の末裔だけである。

今でも、男子は主との契約の印として、割礼を受けなければならない。成人になってから改宗した場合も、である。

旧約はヘブライ語であるが、イエスの時代にはすでにヘブライ語は廃れ、その方言とも言えるアラム語が使われていた。と同時に、ローマ帝国領であったのでラテン語、そしてギリシャの影響も大きかったのでギリシャ語の3言語が使用されていた。現在のヘブライ語は、大戦後のイスラエル建国により復活させたものである。

南朝と北朝に分裂した原因は、背教である。特に、アッシリアやバビロニアの神バアル崇拝が著しい。バアル神とは、ローマ帝国の神で言えば、ディオニソスである。神懸かり的恍惚状態となり、狂乱が支配する。生きた動物を裂いて生肉をむさぼるとか、性的狂乱とか。これこそが、カルト宗教、悪魔崇拝の根元である。

現在、世界中に拡がっているユダヤ人は、アシュケナジー系ユダヤ人とスファラディ系ユダヤ人とに分けられる。元来、ユダヤ人とはヘブライの民のことで、中東起源であるから、白人ではない。そのような正統ユダヤ人のことをスファラディ系ユダヤ人と言う。これに対して、エルサレムの神殿で金貸しを行っていた“呪われたカナン人”は、イエスにより神殿から追放され、フェニキアに渡った。そこは、コーカサスからカスピ海北岸に広がる場所で、カザール王国が支配していた。そこには、白人が多く存在し、カナン人は彼らと混じり合った。また、その王国は特に国家宗教が無かったので、カナン人がもたらしたユダヤ教を信仰することとなった。彼ら及びその子孫が、アシュケナジー系ユダヤ人である。よって、本来の意味でのユダヤ人ではないのである。しかし、

現在、世界で権力を握っているユダヤ人とは、アシュケナジー系である。(現在では、アシュケナジー系は必ずしもユダヤ教徒ではない。キリスト教徒もいる。)

アシュケナジー系は、フェニキアで商業により発展した。更なる発展を求め、ヨーロッパに渡った。その最初の地点をフェニキアにちなんで、“ヴェネチア”と名付けた。彼らは次第に財を成し、いつしか、王侯貴族に金を貸すことが最も金儲けしやすいことに気付いた。金に縛られた貴族や王室は、彼らの手中にあった。そして、一部の者は政略結婚によって貴族となった。このような貴族を、当時のイタリア（ヴェネチア）では“黒い貴族ゲルフ”と言った。純粋なヨーロッパ系と比べて、肌の色が黒く、行いも“黒かった”からである。当時から、ユダヤ人の活動は金貸しなどに制限されていたので、その中で何とかするしか、なかった。中でも、フランクフルトで頭角を現したのが、“赤い盾”を意味するロットシルト、英語読みでロスチャイルド、マイヤー・アムシェル・ロスチャイルドである。ロスチャイルド家は、ニムロデの子孫であると信ずる。ニムロデとは、“バベルの塔”を建造しようとしたバビロニアの英雄と見なされている。マイヤー・アムシェル・ロスチャイルドは、家紋として盾に赤い六芒星を描いた。これで、現在のイスラエルの国旗が六芒星なのは、何を意味するのか解るだろう。ロスチャイルドの資金で建国されたのである。よって、正統スファラディ系ユダヤ人は、現イスラエルを国家として認めていない。(第二次大戦中、連合国がドレスデンのような何も無い街を爆撃し、金融の中心であったフランクフルトは爆撃しなかった。いずれの国も、資金を提供して国家の中核を握っているのは、ロスチャイルド家及びその僕だからである。第一次大戦の時など、フランスの戦争賠償金を、フランスのロットシルト家がすべて負担したのである。また、ユダヤ人を虐殺したナチスは、アシュケナジー系銀行から資金援助を受けていた。)

また、アシュケナジー系の有力者は“イルミナティ”という組織を築いた。(アダム・ヴァイスハウプトにより 1776 年設立。「アダム」か。) この組織が「陰の政府」を組織し、現在、世界を手中に収めており、「三百人委員会」「ローマクラブ」などと呼ばれている。(これらの組織にはフリーメーソンのメンバーもいるだろうが、組織としてのフリーメーソンではない。フリーメーソンとは、古代ユダヤの石工や大工などの職人組合であるが、現在のフリーメーソンにはその面影も無い。) 国連、政治、経済、マスコミ、教会、警察、大学、食料、エネルギー、…。従わないものは、すべて力づくでねじ伏せる。あるいは、自作自演のテロ (9.11 のような) や事件、スキャンダルをでっち上げ、闇に葬る。対立を煽り、戦争を仕掛け、それで儲ける。何故、このようなことが平気のできるのか。それは、イルミナティの組織を知れば解る。

イルミナティは 13 家系からなる。アスター家、バンディ家、コリンズ家、デュポン家 (言わずと知れた化学メーカー)、フリーマン家、ケネディ家 (JFK)、李家、オナシス家、ロックフェラー家、ロスチャイルド家、ラッセル家 (平和運動のバートランド・ラッセル)、ファン・ダイン家のような世界的な大富豪 12 家に、イエスの血を引くと自称する第 13 番目の“聖なるダビデの血流”を合わせた 13 家系である。“13”はカバラ数秘術から見れば最高のパワーが発揮される数字である。12 人の使徒にイエスを合わせて 13 人、というのが、その証拠で

ある。しかし、彼らは“イエスが磔刑に処せられた日の呪われた数字”として悪用している。また、彼らの組織の階層は 33 階層ある。これは、「生命の樹」に於ける 11 個のセフィロト、22 のパスの合計である。隠されたセフィラも利用して悪用している。

彼らの基本は、悪魔（ルシファー）崇拝と言われており、「死の樹」を下降している。故に、彼らにとって“万物を見通す目”は“ルシファーの目”である。トップは“魔王”であるが、それに準じる女性は“闇の女王”と呼ばれる。父親との間にできた初子を生け贄として献げるのが、闇の女王になるための最初の儀式である。現実には人身供儀（子供）を行うため、絶大な暗黒のパワーを手にする。よく知られたハロウィンなどは、裏で儀式殺人を行うためのカモフラージュである。イルミナティが組織されて以来、闇の女王はコリンズ家の者である。（現在は不明。）コリンズ家は、暗黒のパワーではロスチャイルド家を凌ぐ。また、悪行と釣り合うほどの善行を積まなければ、願望は成就されないと信ずることから、第一級の悪魔主義者は最大級の慈善家でもある。（フリッツ・スプリングマイヤー著、「イルミナティ 悪魔の 13 血流」、KK ベストセラーズ。）このようなことは「非現実的である」として、否定しても良いし、認めなくても良い。しかし、真実とは、すべてのことを納得できるように説明できることである。（なお、勘違いしてならないのは、（イルミナティ以外の）彼らの組織に属する者がすべて、そのような考えの基に行動しているわけではない。知っているのは、極々一部の者だけである。多くの者は、名誉やプライドのため、組織に入っているにすぎない。）

このようなことから、ユダヤ人は特にヨーロッパで忌み嫌われる傾向が強く、キリスト教徒の中には、“イエスを十字架に掛けた民族”として断罪しようとしている過激派もある。この考えがエスカレートしたのが、ナチスによるホロコーストである。しかし、聖書の中で“呪われた民”とされたのは、イエスにより神殿から追放された、エルサレムの神殿で金貸しを行っていた“呪われたカナン人”であり、その末裔がイルミナティを組織している連中なのである。

そのルーツの中東では、イスラエルが他の近隣諸国と軋轢を生じている。これは、第二次大戦後、強引にアシュケナジー系ユダヤ人が“約束の地”として入植し、住んでいたアラブ人の権利などを蹂躪したためである。スファラディ系ユダヤ人は、イスラムの社会に溶け込んでおり、アラブ人と平和に共存していたのであるが、それをぶち壊し、対立により世界の火種としたのがアシュケナジー系ユダヤ人なのである。（言うまでもなく、軍産複合体を支配しているのは、アシュケナジー系ユダヤ人である。）

イスラエル政府は、諜報機関モサドを利用して、アークを血眼になって探している。アークが見つかったら、それを安置するソロモンの第三神殿が必要となる。その場所はただ 1 つ、エルサレムの岩のドームである。となると、現在存在するモスクを破壊しなければならない。そうすると…。しかし、アークは呪われた偽ユダヤ人、アシュケナジー系の手には渡らないはずだ。祭司一族レビ族以外の者が触れると、天罰が下るからである。

いずれにしろ、このようなことを知らずして、現在の世界情勢、特に宗教が

関わる紛争や戦争について理解することはできないし、また、議論する資格など無い。日本人は「宗教」とか「悪魔崇拝」とかいうと眉をひそめたり、ありもしないと決め付けたり、関わりたくないと思うが、それではいけないのである。物事の“闇の側面”もしっかり見据え、真実を知らなければならないのである。

宗教とは、真実を隠し、人の心を支配する最も有効、かつ効率的なマインドコントロールである。

参考著書：

- ・学研 NSM ブックスエソテリカ宗教書シリーズ、「ユダヤ教の本」
- ・フリッツ・スプリングマイヤー著、「イルミナティ 悪魔の 13 血流」、KK ベストセラーズ。
- ・学研ムーブックス、ネオ・パラダイム ASKA シリーズ。

初版：2006 年 8 月

改定 4 版：2012 年 4 月

改定 5 版：2012 年 12 月